＜　今日の説教のポイント　ルカによる福音書 23 章 26～43 節　＞

細部ではなく、大きな視点から、十字架の出来事の意味を考える。

1 神の子殺し―私たち人間の罪深さの極み ―イザヤ書 53 章の預言

イエス様が十字架にかけられてから亡くなられるまでの個所を一気に読みました。全体を通して覚えさせられることは何でしょうか？一つは、人間の罪について考えずにはおれないことでしょう。34～38 節には「無関心、嘲笑、罵倒」という、私たちもしばしば本当のことを知らない中で犯してしまう罪の姿を続けざまに見させられます。そのことは 34 節の括弧付きで示されたイエス様の言葉によく表されています ― 「自分が何をしているのか知らないのです」。「知らなかった」は赦される理由にはならないのです、特にそれが無関心、嘲笑、罵倒を他者に対して生じさせているなら。そして、福音書記者共通のこの人間描写は、旧約聖書のイザヤ書 53 章に記された「苦難と死に向かっていかれた主の僕」に示した人々の姿と全く重なるのです。ですから、この出来事の意味もこの預言書の中に探し求めることができるのであり、その内容に救いがあるのです。イザヤ書 53 章を読む。

2 主イエスの死の背景に、神様による贖罪の方法の示しがある！

イエス様の死がなぜ私たちの罪の赦しと関係するのか？　私たちが一番戸惑う問いです。この答えは私たちが自分の頭の中だけで考えていても出て来ません。神様のなさり方に関係しているからです。レビ記 4～5 章には、かつて神様がイスラエル人に「過って：知らないで」罪を犯した時、それに気づいたときに罪を赦してもらえる方法が記されています。神様がその方法を示して下さっているのです！（レビ記 5:17-19 を読む。「それを知らなくても、責めを負い、罰を負う。～行うと、彼の罪は赦される」）。犯した罪は、たとえそれを知らなくてしたとしても責め（罰）を負わなければならない、しかし、それが「無傷の雄羊をささげる」こととして示されているのです。イエス様の十字架の死の出来事はこの文脈から考えなくてはならないし、また考えることができる出来事なのです！　それは、神様が用意して下さった道、罪深い私たちが罪赦される道を行くということです。すなわち、イエス様が自らを捧げて下さった罪の贖いを受け入れるということ、洗礼を受けるということなのです。